

# 第72回日本酪農研究会 北海道札幌市にて開催

日本酪農青年研究連盟（酪青研：檜尾康知委員長）主催の第72回日本酪農研究会が、11月17日、プレミアホテルTSUBAKI札幌にて、全国から選抜された経営発表、意見・事例発表が各6題ずつ行われました。昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止しており、2年ぶりの開催となり、今回の研究会では、感染拡大防止の観点から初となる録画での経営発表やリモート方式での質疑応答も行われました。

本研究会の開催目的は、日頃の経営成果と実践活動の発表に併せ、分析検討・知識技術の交流を通し、山積する諸問題の解決を図りながら、国際競争に勝ち残る我が国の酪農産業の未来を切り拓き、発展に寄与することにあります。

酪青研の檜尾委員長は「2019年の初冬から猛威をふるっている新型コロナウイルスは、我々の日常に大きな変化をもたらしました。2020年からは全世界で新型コロナウイルス感染症対策としてワクチンの開発・接種が進み、感染拡大を抑える取り組みが進んでおります。日本でも2021年に入りワクチン接種が加速度的に進み、感染者数は減少しております。しかしながら、感染の再拡大も懸念されておりました。安心できない状況にあります。日本酪農青年研究連盟の活動においても、日本酪農研究会をはじめとする数々の行事が延期、中止となりました。多くの会議や研修会はリモートで開催する事となり、私自身も盟友の皆さんと、直接お会いして意見交換をする機会が少なくなりました。活動が停滞し、組織としての一体感や活力の低下が懸念される中、日本連盟 常任委員会で第72回日本酪農研究会の開催をするか否か、開催するためにはどのような方法がよいのか、何度も話し合いを行いました。その結果を踏まえ、会場の規模、発表の形式等を決定し、ご来賓、審査委員、発表者の方々の理解を得て、第72回日本酪農研究会を開催するに至りました。大会の開催は、皆様方の酪青研に対する思いが形になったものであると考えます。今回の大会が、日本酪農青年研究連盟の「勇気をもって踏み出した」新しい第一歩となり、困難な状況の中で未来を切り開く努力を続ける盟友の後押しとなることを祈念いたします。」と挨拶されました。

雪印メグミルクグループを代表して西尾代表取締役社長は「新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの社会に、そして酪農乳業界にも、多大な影響を及ぼしました。人々は、今までの日常とは異なる行動様式を求められ、消費構造にも大きな変化が生じました。従来と異なる生活者のニーズをどのように捉え、いかに対応していくかは、我々酪農乳業界にとっても、今後の重要な課題になるものと考えております。一方で、私たちが今生きている世界は、目覚ましい経済成長により生活が豊かになった半面、地球温暖化や気候変動などの環境問題の深刻化、貧困や差別などの格差の拡大、児童労働などの人権問題といった、様々な社会課題が生まれています。これらの課題解決に向けて、2015年に「SDGs（持続可能な社会の実現に向けた国際目標）」が国連で採択されました。今後は、個人、企業、そして業界全体が、SDGsの目標を自らの目標として捉え、自分たちは何をすべきなのかを明確にした上で、行動していかなければならないと考えます。私たち雪印メグミルクグループも、事業活動を通じて、社会課題の解決に

取り組み、健全で豊かな環境を将来世代に継承することのできる、持続可能な社会の実現を目指しています。黒澤西蔵翁はかつて、人々の健康と社会の繁栄を実現する「酪農救国」を提唱しました。この「酪農救国」の精神は、我々が取り組んでいる持続可能な社会の実現と、乳（ミルク）を通じて人々の健康に貢献するという、雪印メグミルクグループの使命に通ずるところであります。当社グループは、先達の「酪農への想い」を受け継ぎ、時代をしっかりと見据えて、この変わらぬ使命を果たしてまいります。」と挨拶されました。

研究会では、全国から選抜された酪農家6名による酪農経営発表と6名の意見・事例発表が行われ、酪農経営発表の中から「自給飼料でゆとりある持続的な酪農を目指して」と題して発表した南部十勝地方連（北海道）の村崎隆一さんが最優秀賞（黒澤賞）・農林水産大臣賞を受賞されました。

当社からも村崎氏には雪印種苗賞とあわせて副賞のシクラメンを贈呈させていただきました。

受賞された村崎牧場は、北海道十勝地域の大樹町に立地する酪農専業経営で、労働力は家族4名、パート従業員1名、飼料作面積27ha、牧草地面積60ha、経産牛134頭という、規模の大きな家族経営です。村崎さんは4代目で、平成16年に26歳でUターン就農し、平成28年に38歳で経営継承しています。

就農後の平成25年に建設したFS牛舎・MP体系による規模拡大を契機に、「人も牛も無理せず、既存の資源で最大限のパフォーマンスを生み出す」ことを経営理念としました。具体的には、高泌乳の追求から自給飼料を基盤とする酪農への転換です。そのため、飼料生産体系を見直し、牧草ではOG（オーチャードグラス）主体混播草地の導入、トウモロコシではマルチ栽培を導入しました。その結果、飼料品質と単収の向上、作業時期の分散が実現しました。そのなかで、酪総研の実証圃場事業に取り組み、植生調査や収量調査、土壌分析などを行い、記録することにより圃場を見える化するなど、草地管理のお手本になる取り組みになっています。

これらの成果である、良質な自給飼料は牛を健康にし、収益性を高めることになり、作業を委託（外部化）する余裕が生まれました。その結果、ゆとりのある家庭生活が実現し、「人も牛も無理しない経営」につながっています。経営指標をみると、TDN自給率は67%と高く、乳飼比は19.7と低くなっています。1kgあたり生乳生産原価は73円と低く、酪農部門所得22,673千円、労働10時間あたり所得は31,795円と、高い水準を達成しています。なかでも経産牛あたり労働時間は66時間と発表事例の中では最も短く、体細胞数も最少です。

このように、村崎牧場は、FS牛舎・MPに投資しながら、高泌乳以外の経営戦略の可能性を示した事例といえます。今後に向けて、両親の高齢化による労働力の減少を見込んで、研修生・実習生用の簡易住宅を建設済みであり、マニュアルを作成する意向です。家族労働力と従業員に作業委託を組み合わせた、ゆとりのある酪農経営のモデルとなることを期待します。

発表会後に行われた特別講演では、2021年6月に公開された映画「ヒノマルソウル ～舞台裏の英雄たち～」のモデルとなった雪印メグミルク(株)社員である元スキージャンプ選手 西方仁也氏の講演、また長野オリンピックで金メダルを獲得した一人、同社員である齋藤浩哉氏と西方氏を交えたトークショーを開催致し大変有意義な全国大会となりました。



会場壇上の様子



最優秀賞（黒澤賞）の授与 村崎隆一氏（左）、檜尾康知委員長（右）



当社の展示用ブース